

特集

## 放射線技術科学科における臨床実習前教育の現状

吉田 豊

純真学園大学 保健医療学部 放射線技術科学科

The current state of academic education for clinical training in the department  
of radiological science

Yutaka YOSHIDA

Department of Radiological Science, Faculty of Health Sciences, JUNSHIN GAKUEN University

【要旨】 新型コロナウイルス感染症の影響を受けた2020年度以降、臨床実習受け入れ辞退や実習中断が相次いだ。幸い、全学生に対して2022年度まで学内実習に振り替えることなく臨床実習を継続できているが、実際には見学のための臨床実習となっているケースもある。放射線技術科学科の学生には臨床実習が見学のみとなった場合であっても、患者接遇やコミュニケーションに関する知識と技術を身につけられるよう、臨床実習前教育として、感染対策、患者移乗介助、患者接遇に関する実習に力を入れてきた。一定の成果が得られており、今後も臨床実習前教育の改善を進めていく。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、臨床実習前教育、感染対策、患者移乗介助、患者接遇

### 1. はじめに

放射線技術科学科では、九州・沖縄、中国地方の100施設以上と臨床実習契約を結んでおり、学生の出身地や希望に応じて、各地の施設に臨床実習の受け入れを依頼している。2019年度までは感染対策における特別な配慮は必要なかったが、新型コロナウイルス感染症の影響を受けた2020年度、臨床実習受け入れ辞退や実習中断が相次いだ。幸い、実習施設や日程の変更によって年度内にすべての学生が臨床実習を終えることはできたが、次年度からの臨床実習実施に対し、大きな不安を残した。臨床実習が実施できなければ学内実習で振り替えるしかないが、本学が所有していない医療機器（放射線治療装置や核医学検査関連装置）の実習を行うことはできないため、学外施設で臨床実習を全うできるよう進めてきた。2022年度には臨床実習中に複数の学生が陽性となり、感染源も不明であったことから、感染対策を講じて感染をコントロールできない現実と、感染対策教育の難しさを痛感したが、実習受け入れ施設のご協力のおかげで、2021年度、2022年度ともに学内実習に振り替えることなく臨床実習を継続できている。

### 2. 臨床実習前教育

2020年度の臨床実習では、未知の新型コロナウイルス感染症に対する警戒感から、どの施設でも学生が患者と接することは見送られ、臨床実習は見学のみとなった。近年、臨床実習前教育のあり方<sup>1)</sup>が提案され、臨床実習に関しても見学型から参加型への移行が謳われるようになっており、各実習施設においても感染リスクが低い状況下で、学生が患者接遇を実践できる場を提供していただけるようになってきているが、現在も見学のための臨床実習を継続せざるを得ない施設もある。臨床実習が見学のみとなってしまうのは、本来の目的を達成できないため、2020年度以降、本学科の学生には患者接遇やコミュニケーションに関する知識と技術を身につけられるよう、臨床実習前教育として、2年次および3年次の学内実習に力を入れるようにしてきた。

令和5年2月13日

純真学園大学 保健医療学部 放射線技術科学科 准教授

### 3. 感染対策教育の強化

大学全体として実施してきたことであるが、学内での実習中は学生同士が近い距離で接することになるため、実習前の検温および体調報告を必須とし、マスク着用を原則とした。また、これまで学科の実験室で実習を行ってきたが、MLC (medical learning center) の実習室で留置針と静脈穿刺用腕モデルを用いた実習やBLS (basic life support) の実習を行うことができるようになってから、医療現場を意識した実習が可能となった。特に手指衛生については、学科の実験室では多数の学生が同時に手洗いできる環境がなかったため、MLCの実習室では十分に余裕を持って効果的に指導することができている。手指消毒を行うタイミングに加え、正しい手順で手指消毒を行うことが必要であり、流水と石鹸、アルコール消毒液による手指消毒の手順の確認に時間をかけることができたのは非常に大きなメリットになった。MLC以外での学内実習でも、適宜、学生に手指消毒を促し、手順を忘れさせないように対応した。臨床実習の際にも学生に携帯用アルコール消毒液を持参させている。

### 4. 患者移乗介助に関する実習

診療放射線技師は大型医療機器を用いた検査や治療に従事しており、複雑な操作を必要とする医療機器を適切に使用する必要がある。この点で、診療放射線技師の業務は機械の相手さえしておけば良いと学生に勘違いされがちであるが、当然、患者を相手にしなくて良いということではない。検査や治療を実施するためには多くの場合、患者は仰臥位になることを強いられ、患者を仰臥位にさせる以上、寝台に安全に寝かせる技術、寝台から安全に起こす技術を身につけておかなければならない。現在までに、診療放射線技師国家試験には移乗介助技術の詳細に関する出題がなかったことから、養成校で移乗介助の教育をする機会は少なく、病院に就職して業務をしながら介助技術を覚えるのが慣例であったと思われる。しかし、基礎知識を持たないまま移乗介助を実施することがあっては、介助者にとっても被介助者にとっても危険である。臨床実習で患者と接する機会が減ったとしても、正しい知識を身につけた上で診療放射線技師として業務を行うことができるように、患者の移乗介助技術を習得するための実習を行っている。学生の臨床実習後のアンケートによると、学生が臨床実習中に患者の移乗介助を経験することが増えており、移乗介助技術の必要性を認識する意見が多くなっていることから、学内実習の教育効果があるものと感じている。患者に直接接触れることで感染リスクは高まるが、将来そのような現場で業務に当たることを考えれば、コロナ禍における臨床実習にもかかわらず、見学型から参加型への移行を進めていただけることは歓迎すべきことである。

### 5. 患者接遇、ポジショニングの実技試験

すでに全国各地の診療放射線技師養成校においてもOSCE (objective structured clinical examination) を意識した教育が導入されているが、本学でも、模擬患者に対する胸部単純X線検査、X線CT検査、MRI検査を想定し、実技試験を実施している。患者の呼び入れから案内、装置の操作と安全な患者の誘導、ポジショニング、検査終了後の案内まで、適切にコミュニケーションをとりながら患者接遇を実践できているかどうかを評価している。臨床実習前後にこの実技試験についてのアンケート調査を行っているが、高評価の意見が多い。以下に回答例を一部示す。

- ・実技試験を行ったことで、臨床現場においてその経験を活かすことができた。
- ・臨床実習講座の実技試験があって事前にできていたので実際の患者さんを困らせることがなかったのによかったです。
- ・実技試験をしていたことで、何が大切かということを理解した上で、実際の臨床の現場を見学できたため、より理解が深まりました。

接客業のアルバイトなどを通じて、マニュアルに沿った接客技術を身につけている学生もいるが、臨床実習を想定した対応になると、適切な対応の仕方や言葉遣い、身だしなみに関して、学生には全く検討がつかない。この実技試験のために、言葉だけでなく身体の使い方を連動させ、自分で考えながら何度も練習を繰り返すことで、より実践的に患者接遇を身につけることができ、臨床実習に役立てることができているようである。はじめは棒読みしかできないセリフも、徐々に抑揚をつけることができるようになり、さらにゆっくり、はっきり話せるようになることで、学生が自信を持って実習に臨むことができるようになると感じている。

## 6. 最後に

コロナ禍における臨床実習に向けて、感染対策教育に重きを置かなければならない状況はあるものの、本来、臨床に必要な知識と技術に触れることができる臨床実習で、その機会を逸することがないように、また、臨床実習で実際に経験できるように、学内実習で確実に教育することの重要性をあらためて認識することができた。これからも、感染対策は特別なことではなく当たり前のことであり、より実践的な診療放射線技師教育が実施できるよう、臨床実習受け入れ施設や学生の意見を反映しながら改善していきたい。

## 参考文献

- 1) 「診療放射線技師養成所指導ガイドラインについて」の改正等について。医政発0930第12号（令和3年9月30日）。